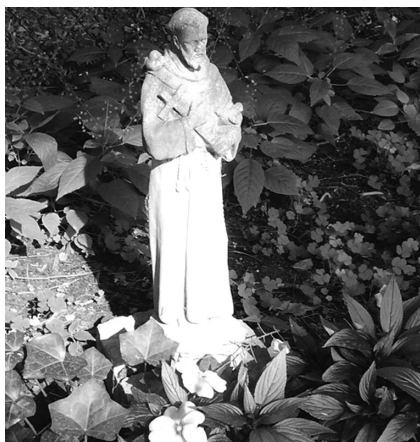


聖フランシスコの「清貧」の精神と現代社会



著者自宅の庭にある聖フランシスコの像

第4回 人間と地球の間の 平和

神谷秀樹 MITANI
HIDEKI

東京大学生産技術研究所、
同医科学研究所シニアアドバイザー

聖人が歌った「被造物の賛歌」

聖フランシスコはこよなく動物や自然を愛したが、聖人は基本的に宇宙の中に存在する「小さき者」である自分を意識しておられたのではないだろうか。私の家の庭には、聖人の小さな石像を置いているが、その右肩と十字架を持つ左腕には、鳩がそれぞれ一羽止まっている。聖人が小鳥にした説教は次のようなものだったと伝えられている。

「兄弟である鳥たち、あなた方はあなたの造り主を大いに褒め讃え、いつも愛さなければいけない。なぜならば、神様はあなた方に身にまとうための羽毛や飛ぶための翼、そして他にあなた方が必要とするすべてのものを与えて下さったのだから。神様はあなたがたを他の被造物の中でも尊きものとしてお造りになり、澄んだ大気の中で飛び交うことを認めて下さった。あなた方は種を撒かず、刈り取ることもしないのに、神様はあなた方を助け、面倒を見、あらゆる心配事からあなた方を解き放って下さっているのだ」(C・フルゴーニ『アッシジのフランチェスコ』白水社)

私たち夫婦がアッシジを訪れたとき、丘の上にサン・フランチェスコ聖堂が見えてきたところで、急に空気が

が変わったことを感じた。少しひんやりしたような、静謐な空気という感じで驚きもしたが、「これが聖地の空気なのだ」とも感じた。夕刻になると、ホテルからはたくさんの鳥たちの群れが飛び交っているのが見えた。アシジの人々に大事にされているのだろう。

聖人の愛は小鳥たちにとどまるものではなかった。

彼の「被造物の賛歌（太陽の賛歌）」は火、風、水、地という万物を構成するものを賛美するものだった。

私は幸いなことに、仕事の上でも個人生活の上でも、自然の恵みのすばらしさに触れる機会を得た。仕事では米国アリゾナ州南東部の砂漠を灌漑し、ピスタチオやピーカンの果樹園に変える事業に参加している。木と太陽と水と人間の努力により、大地に育つ木が森を形成し、栄養価の高いナッツを生産し、またその収益が雇用を生み出す。そんな事業だ。

個人生活で人間以外の被造物のすばらしさを学んだのは、ジャック・ラッセル・テリアの子犬を育てた経験からだった。神さまからお預かりした命と思い、大切に育てた愛犬から、私は無条件の愛、そして病気と闘う強さを学んだ。家を留守にして一人ぼっちにしようが、帰宅すれば尻尾を振って大歓迎してくれる彼女

は決して恨まず、ゆるしを体現していた。犬の感受性は、人間のそれを凌駕するものと学んだのである。

日本を代表する画家であり、エッセイストでもある堀文子氏はこのように書いている。

「月をお月様と呼んだ日本人の言葉がふと気にかかった。暮らしの中の大切なものに『お』という敬語をつけた日本語。お日さま、お月さま、お星さま。天体には様までつけて敬う」「いま、人は経済と効率を求め、欲望充足の為の文明に埋もれ、人間が生き物だということをお忘れ、その文明に飼いならされた家畜に変わった……コンクリート詰めにされた人間は自分の脳で考えず、コンピュータの言うなりの無感動、無機質な生き物になり始めた。日本人はわずかの間に壊れていったようだ」（『命といふもの』小学館）

「被造物の賛歌」を歌った聖人の感性は、日本人の多くにとって決して異邦人のものではなく、極めてわかりやすいものではないだろうか。

教皇の問題提起

日本人がわずかの間に壊してしまったと言う堀氏と同じことを、教皇は使徒的勧告『福音の喜び』でこう

おっしゃっている。

「わたしたちは、貨幣が自分たちと自分たちの社会を支配することを、素直に受け入れてしまったのです……わたしたちは〔貨幣という〕新しい偶像を造ってしまったのです……金融と経済に影響する世界的な危機は、そのシステムにおけるバランスの欠如、そしてなによりも人間らしい方向感覚の欠如、その深刻さを示しています」(55)

「権力欲と所有欲には際限がありません。利益増大のためにすべてを食い尽くすこのシステムにおいては、自然環境のような傷つきやすいものはすべて、神格化された絶対法則へと変換された市場利益の前に無防備なのです」(56)

さらに教皇は、昨年出された回勅『ラウダート・シ』で、金儲けが神のようになった世界では、弱い者が身を守る方法はないと指摘されている。これは神の前にゆるされることなのだろうか。継続可能なことなのだろうか。その善悪に関して、我々は心の中では何が正解かはわかっているはずだ。この世のほとんどの人々は、これ以上自然環境を傷つけてはいけないと考へてはいる。しかし、貨幣という偶像の前には無力に

なつて、改善するための行動にはなかなか移れない。

教皇は、個人の心の中の平和、人間社会の平和、そして地球の平和は切り離しえない一つのものだと説いておられる。前教皇ベネディクト十六世も、人間が無責任に自然環境と社会環境を破壊することは悪魔のなせる業わざだと指摘された。堀氏のような画家でなくとも、感性豊かな日本人は皆、自然環境を破壊しては、社会の平和も人間個人の平和もありえないことを心の底では知っているとは私は確信する。しかしながら、実際には堀氏が指摘した「文明に飼いならされた家畜」のごとき生活態度を自ら改めようとはしないというのも、またもう一方の事実である。

大型化する台風、竜巻、洪水、山火事、感染症の被害を見ていると、どれほど地球が悲鳴をあげているのかがわかる。『ラウダート・シ』において教皇は、私たち皆の家である地球は、私たちとともに生きる兄弟でもあるとおっしゃっている。そして、神さまが預けてくださった良いものを人間が無責任に使っているため、この兄弟が今、叫び声を上げていると指摘されている。

昨年十二月、「COP21パリ協定」が締結に至り、

地球温暖化に歯止めをかけるため世界が一致して努力することが約束された。この協定が締結されたことを喜んでいるお一人が教皇ではないかと思う。しかしアメリカでは、議会多数派の共和党のほとんどの議員が温暖化の事実さえ認めようとしないうし、この協定は経済成長を阻むとして反対する大統領候補もいる。また日本を含め、温暖化の抑制を理由にして原子力発電を推進しようとする勢力も存在する。使用済み核燃料という、最も地球を汚染する廃棄物の処理施設が十分に整っていないにもかかわらずである。パリ協定は一歩前進ではあるが、これからの道程はまだまだ遠い。

福島原発事故現場の後始末もできないうちに日本の原発は再稼働されている。また、敵国の宇宙船を撃ち落とすための宇宙戦争技術をはじめ、核兵器、生命科学兵器、事故を頻繁に起こすエネルギー資源、環境汚染を放置したままの鉱山など、さまざまな開発が進んでいる。地球温暖化の原因ともなる森林伐採もどまるところを知らない。貧困国においては環境を論じるどころか、最低限の衛生状態や飲料水の確保も難しいような状況が改善されずに放置されている。

絶滅する種

動植物では絶滅する種が急増しているが、教皇は人間に生き物を絶滅させる権利はないと訴えておられる。最近身近でこの話をしてくれたのは、高校時代の友人の村田敏健君だった。高校時代、彼は生物部で昆虫採集が趣味だった。彼は定年を迎えてから、ブラジルで暮らす同級生にイグアスの滝やアマゾン案内してもらい、昆虫採集に出かけた。昆虫採集と言っても網は持たず、カメラでの撮影だ。たくさんの写真を見せながら、「イグアス近辺だけで全ヨーロッパにいる蝶の種類と同じくらいの種の異なる蝶が見られるよ」と話してくれた。その続きは「でも、どんどん絶滅していつていっているんだ」ということだった。

地球から絶滅しそうな野生動物を「絶滅危惧種」と呼ぶが、IUCN（国際自然保護連合）の報告によると、ほ乳類では約二割、両生類では約三割がすでに絶滅危惧種になっている。また近い将来、絶滅危惧種になると予想される生物は、ほ乳類で約五割、鳥類では約八割である。人間が今のままの生活を続けていると、そう遠くない未来に地球上から、ほとんどの生物が消えてしまうかもしれない。

私はこの警告を読んでわが目を疑った。「一年に四万種以上の生物が絶滅している」とは知らず、まったくの無関心であった。人類が、地球上での営みの方法を変えようというのは、明日の課題ではない。今日の課題なのだ。これらの種が絶滅していくなかで、人類だけが繁栄することなど起こるわけがないということとは、容易に想像できるのではないだろうか。

旭川動物園園長の坂東元氏は、日本人が絶滅させた初めての種はエゾオオカミだと言い、その悲劇は「ヒトの一方的な都合による殺戮の歴史です」と述べている（「エゾオオカミ絶滅の悲劇を忘れないために」日本経済新聞、二〇一五年八月二十八日付）。

人間による人類の絶滅

エゾオオカミの絶滅を知って私が考えたことは、むしろ人間による人類を絶滅させる危機だった。「成長」という偶像を信仰する人類は、一層の効率化を求めて科学を進歩させている。もはや人工知能（AI）の演算スピードが人間の脳の能力を超えるのは時間の問題だという。またロボット技術の進歩も著しい。そして、こうしたAIとロボット技術の進歩にいちばんお金を

投じているのは軍需産業と金融産業だ。

教皇は『ラウダート・シ』において、科学技術という人間が手にした能力は恐ろしい力でもあり、人間がこの力を常に良いことのために用いるという保証はないと述べておられるが、その通りの懸念を私も持つ。

金融産業においては、すでに個人の資金運用をアドバイスする「ファイナンシャル・アドバイザー」を人間ではなく、ロボットに置き換える研究が進んでいる。人間の金銭欲が人間を支配するということは昔から変わらないが、加えてお金がロボットによって管理されるようになる。「人間がお金を媒体にロボットに支配される時代」がそこまで来ている。

証券市場での株の売買の六割、為替や債券市場ではさらに高い比率で、すでにコンピューターが自動的に超高速で売買している。

さて、軍隊はどうだろう。高度なAIを搭載した「ロボット兵」による兵団、すなわち殺人と破壊だけを使命とするロボット集団の誕生に、そう時間はかからないと思われる。すでに空からは「ドローン」と呼ばれる、無人飛行機がどこにも爆撃に向かっている。無人運転自動車（自動運転車）の開発も進んでいるが、

これは社会から運転手という職業をなくしてしまうだけでなく、「無人運転戦車」も製造可能となり、やがて戦場では、一般人の大虐殺を引き起こすだろう。

またAIの技術革新を待ち望んでいるのは、宇宙戦争兵器を開発している人々である。敵国の宇宙船を地上から破壊するにはAIの改良を必要とする。敵国のGPS（全地球測位システム）の破壊に成功すれば、GPSを頼りに動いている航空機や、船舶、地上の移動施設（カーナビ〔自動車ルート検索〕に頼るあなたの自動車もその一つだ）にどれほどの混乱が生じるだろうか。想像するだけでも恐ろしい。

人は最も効率的な資金運用を狙うと同時に最も効率的な戦争の仕方を追求してきた。一昨年に亡くなった日本の経済学者・宇沢弘文によれば、ベトナム戦争以降の米国経済学でさえ、効率的な戦争の仕方を追求するものだったという。ちなみに宇沢は、経済学の原点は人間であると説き続け、一九九〇年に聖ヨハネ・パウロ二世の要請で回勅『*Centesimus Annus*』（邦題『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえって』。現代の視点から社会問題に示唆を与えている）の作成にも参加した人物である。彼は「資本主義的な制度が所得配分の不

平等を生み出し、公正、平等という観点から好ましくない効果を持つ」とし、地球温暖化が「おそらく二十世紀に人類が直面する最も深刻な問題となることは間違いないであろう」とも指摘していた。

AIは無宗教であり、完璧な無神論者である。はたして、人間はこうした技術をコントロールする叡智を持つのだろうか。日本政府は国立大学に対して、文部科学省を通じて人文科学系など実社会で、役に立たないとする学部は減らして実学部門を推進するよう指導し始めると伝えられた。恐ろしいことだと言わざるを得ない。すでに人間が自ら人間性を捨てる、狂気の世界に突入している。

マキアベリの忠告

教皇が「無関心であってはいけない」とおっしゃるように、我々は無関心のグローバル化をこれ以上進めさせてはいけない。しかし、それがわかっていながら行動に移せない人々には、ルネサンス期のフィレンツェ共和国において愛国心旺盛な官僚であったニコロ・マキアベリが、危機に瀕した共和国市民にあてた忠告をお伝えしたい。もし彼が現代世界に生きていた

ならば、同様の忠告を世界の指導者たちすべてに対して伝えて伝えようとしたのではないか。

「普通、人間は、隣人の危機を見て賢くなるものである。それなのにあなた方は、自ら直面している危機からも学ばず、あなた方自身に対する信ももたず、失った、または現に失いつつある時間すらも認識しようとはしない……運は、制度を変える勇氣をもたない者には、その裁定を変えようとはしないし、天も、自ら破滅したいと思う者は、助けようとしないうし、助けられるものでもないのである。自由なフィレンツェ人であるあなた方が、そしてそれを決定できる力をもつあなた方が、自滅を望んでいるとはどうしても信じられない……あなた方が、自由に生まれ、自由に生きたいと望む者ならば考慮せずにはいられないことを、尊重されるに違いないと信じるのである」(塩野七生『わが友マキアヴェッリ』新潮文庫)

作家の塩野七生氏は、イタリアにおけるルネサンス運動は聖人の登場から始まったという。私が理解するところでは、その運動はマキアベリの時代まで続くが、フィレンツェはフランスとの戦争に敗れ、またペストの大流行で多くの人口を失い、衰退していった。

現代に生きる我々は、聖人の登場が発端となったイタリア・ルネサンスの中心だったフィレンツェの歴史に、いったい何を学ぶことができるのだろうか。学ぶべきことは多いが、学ぶ意志を持つのかどうかは、我々の選択次第なのである。今、教皇フランシスコという稀有な指導者を得て、私は「人間復興なくして経済復興なし！」と呼びかけている。

現代社会においては、人間の尊厳とは何かを確認すること、そして天地を創造した神の前にへりくだり、人間とすべての被造物との間の調和を見出すことに努めることができます。

私たちは、聖人の「平和の祈り」を心の底から祈ることにより、その努力を始め、また継続していくことができるのではなからうか。主は平和を求める我々に、常に寄り添って歩いてくださっている。

“Peace be with you” (主の平和があなたとともにありますように！)

「被造物の賛歌(太陽の賛歌)」は女子パウロ会のホームページでお読みなれます。

http://www.pauline.or.jp/prayingtime/vari_taiyo.php